

私たちの思い出の場所

伯水楼 白水洋幸さん

たくさんの出会いに恵まれた40年

長崎大学の東門を出て10分もかからない場所に、私の店「伯水楼」があります。開店は1982年。当初から、長崎大学の皆さんにはご虫屋にしていたでいます。でも実はここは、近所に大学があることを知らずに決めた物件でした。第一候補だった物件が埋まってしまったため、現在の店舗に入ることにしました。蓋を開けてみると、たくさんの学生さんや先生が食べに来てくれる店になりました。

人気メニューは肉チャーハンです。オープン後しばらくして、四川丼をメニューに入れてみたら、これも大当たりでした。うちの店は盛りの良さが有名ですが、味も他

には負けていませんよ。ちなみに大盛りになったのは、私が細かい計算が苦手だからです。材料が少し残るくらいだったら入れてしまえ！これを続けているうちに、いつの間にか大盛りになりました。アルバイトしてくれた長崎大学の学生さんは、40年で延べ100人にはなるでしょう。多い時期は15人くらいが交代で働いていました。コロナ禍以降は出勤がなくなったので、今は2、3人です。出勤といえば、以前は長崎大学の学食は17時で閉まっていたと思います。水産学部の学生さんが会合をする時に、学食まで出前したこともあり

ました。バイト生の中には個性的な学生さんもいて、店にトイレ用のスリッパを履いてきたので、その日はきつく叱りました。皆さんのことを、私は自分の子どものように思っています。だから厳しいことも、遠慮なく言わせてもらいます。昔はバ



人気メニューの肉チャーハンと四川丼。

名物マスターの白水さん。



思い出の場所はありますか？



ジェームズ・ディーンのポスターを貼った店内は開店当初のままの雰囲気。

イト生と店で忘年会やマージャンもしました。バイト生のお父さんに店の内装工事をやってもらったこともありますし、経済学部生の頃に働いてくれた方のお嬢さんが、食べに来てくれたこともありました。また、来店した学生に「誰かいい人いない?」と恋愛相談をされて、お客さんと来ていた学生を紹介したこともありましたね。その後二人は結婚することになり、結婚

式には店を閉めて私も出席しました。今はお子さんが3人いるお父さん、お母さんになっています。いい思い出です。私も74歳になりました。店を続けられるのも、あと10年でしょうか。卒業生の皆さん、私が元気なうちに顔を見に来てほしい(笑)。

アンケートのご協力をお願い

広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。①面白かった記事 ②本紙に対する意見・感想 ③今後取り扱ってほしい内容 ④長崎大学からの情報発信全般についての意見・感想 ⑤本学とご関係 ⑥年齢 ⑦氏名(ふりがな) ⑧郵便番号 ⑨住所 ⑩電話番号を明記してください。



- ハガキ/〒851-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛
- FAX / 095-819-2156
- メール / kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp
- 応募締切日 / 2023年10月末

読者プレゼント

波佐見焼 そばちょこ(2個セット)

アンケートにご協力いただいた皆様の中から抽選で5名様に「波佐見焼 そばちょこ(2個セット)」をプレゼントします。長崎の伝統工芸品である「長崎ハタ」の文様をあしらった、長崎県産波佐見焼のそばちょこ。小鉢として副菜やデザートを盛り付けたり、スープをよそったり、様々な用途でご使用いただけます。長崎大学のロゴが入ったオリジナル商品(非売品)です。

※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



長崎大学 感染症研究出島特区



https://dida.nagasaki-u.ac.jp/

2022年4月に新設された感染症研究出島特区のホームページ。出島特区の概要やワクチン研究開発に係る最新情報をお届けします。

長崎大学SNSサイト



Twitter



Facebook



Instagram



YouTube



国立大学法人 長崎大学 NAGASAKI UNIVERSITY

人を結ぶ 地域と繋ぐ [長崎大学チョーホー]



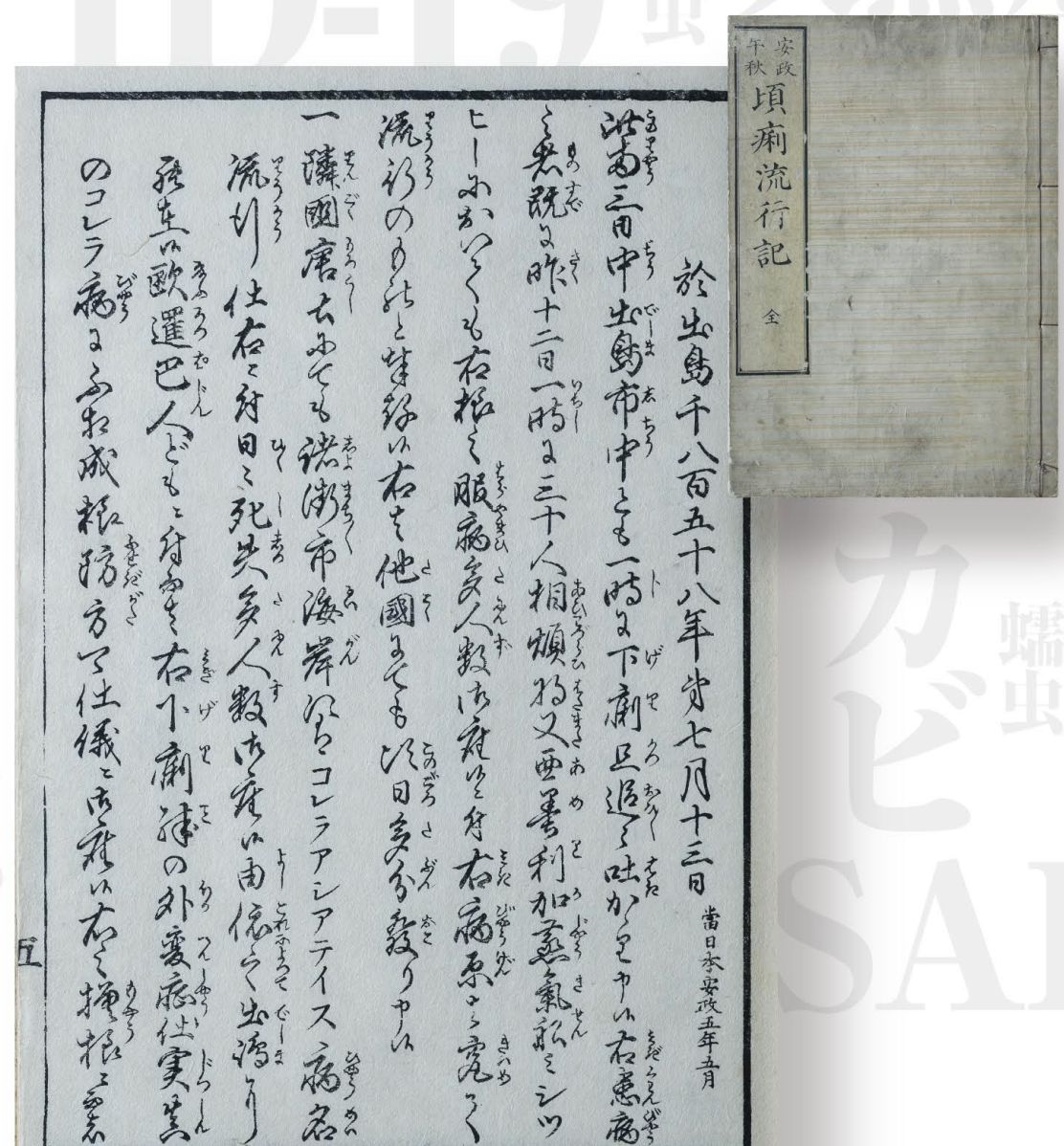
「人を結ぶ 地域と繋ぐ」をコンセプトに、長崎大学の思いや姿、描く未来などを共有し、多くの皆様から長崎大学へ関心を寄せいただくような広報紙を目指します。

COVID-19 天然痘 ウイルス 細菌 SARS

安政午秋頃痢流行記

金屯道人(仮名垣魯文著、安政五(一八五八)年(長崎大学附属図書館医学分館所蔵)

安政五(一八五八)年、長崎から江戸まで広まったコレラ禍の被害状況や奇談、まじない等を記した資料。写真は長崎出島に渡来したオランダ人が、奉行所へ提出した文書の和訳の冒頭部分です。この二、三日のうちに、出島も市中も、突然下痢になり、後に嘔吐する者がありました。このような症状の者が、既に昨日十二日には一時に三十人に上りました。はたまた、アメリカ蒸気船「シッピア」号においても、この症状の者が多数であり、中略。この病は、外国でも最近頻りに発生しております。二等が記されており、日本だけでなく世界で流行している病であることは明らかだと報告しています。名前の記載から、報告者はボンベと考えられています。



寄生虫 ワクチン

感染症に挑む



河野 茂 長崎大学 学長

長崎大学は「挑戦」を続けています。この挑戦は、今、大きく評価されています。2023年5月、長崎市で開催されたG7長崎保健大臣会合で、加藤厚生労働大臣はこのように切り出しました。「長崎市は熱帯医学研究所を有する長崎大学を中心に、世界の医療や公衆衛生分野の発展に貢献してきた街」。確かに、2020年初頭から広がった新型コロナウイルスのパンデミックでは、本学出身の医療系研究者や臨床家が、全国的に活躍し、毎日のように新聞やテレビで、情報

を発信し続けました。未知の感染症に対する挑戦的な勇気ある行動でした。医療系の教職員だけではなく、コロナ禍では、ビッグデータを利用した研究や実践、あらたな教育方法へのトライ、海外の人々とのコミュニケーションの展開等、全学部を挙げて挑戦してきました。長崎大学が「挑戦」を続ける、その背景には、開学の創業者であるオランダ軍医のボンベが、幕末の長崎でコレラや天然痘等の感染症に果敢に挑んだ歴史の源があるからかもしれません。世界で唯一の被爆した医科大学として多くの犠牲を伴いながらも復興した歴史があるからかもしれません。また、戦後国内で感染症研究施設が次々に閉

鎖され、研究者が激減した際も長崎大学では愚直に研究を続けました。私は思っています。長崎大学人は今後も、どんな困難にも立ち向かっていくのだろう、と。そして、皆さんは、知っています。感染症の予防や対策は医療系だけでなく、行政の力や、データを解析する力、さらに、経済との両立、学校教育の遂行…。つまり、10学部を持つ本学の総合的な力を今後も発揮することが望まれています。今号では、長崎大学のこれまでの感染症対応を経て、今後の取り組みに至るまでを特集します。私たちの「挑戦」を共有いただき、将来、一緒に行動したいと思ってもえれば幸いです。

鎖国時代、対外貿易の拠点だった長崎は、さまざまな輸入品、文化に加え、ヨーロッパ諸国の先進的な医学研究の技術等が持ち込まれ、近代西洋医学教育の礎の地になっていきます。一方、海路を通じた人々の往来は、招かれざる未知の感染症の広がりにもつながりました。今もなお繰り返される感染症の猛威と人類との闘い。長崎は闘いの最前線となり、その歴史は、長崎大学の感染症研究の歴史そのものと言えるでしょう。そして気概溢れる研究者や医師たちの存在なくしては、長崎大学の今も未来も語ることはできません。今号では、長崎大学における感染症研究の歴史を振り返ります。

1 感染症は克服された はたしてそうだろうか。

1942年、長崎医科大学(現在の長崎大学医学部)に東亜風土病研究所が設置され、中国大陸におけるコレラ、チフス、赤痢などの研究が始まりました。それが、戦後には風土病研究所に改称され、主に九州の風土病の調査研究が行われていきます。また、まだ米国の統治下にあった沖縄では、フィラリア症や肺吸虫症などの調査や集団検診法の指導にもあたりました。さらに1960年代初頭には、五島列島をはじめとする長崎県内で大流行したパンクロフト系状虫症の撲滅にも貢献するなど、長崎大学の感染症研究者や医師たちは、広く現地に足を運び、目覚ましい成果を挙げます。そしてこのような研究者や医師たちの奮闘と、国内における衛生環境の改善、抗生物質の開発などが進んだ結果、1960年代には国内の風土病(感染症)は克服されたと言われるまでになったのです。しかし、それは皮肉にも風土病研究所の存続を脅かす理由にもなりました。

感染症は克服された——。はたして本当にそうだったのでしょうか。

※1 パンクロフト系状虫症
蚊が媒介し人間のリンパ系に寄生するフィラリア症。



コレラは明治18(1885)年にも大流行。同年発行の地図に、コレラにより死亡した人の数と、全治した人の数を書き込んだ「長崎港内全図」(長崎大学附属図書館医学分館所蔵)。



町ごとに赤丸で死者数(822)、黒丸で全治者数(456)を記しています。致死率は約64%でした。

2 地に足を付けた現場の

タンザニア国キオンボ二島における片峰大助隊長と現地住民。(1965年8月10日)



1964年、風土病研究所講師の林薫氏(のちに教授)は京都大学アフリカ学術調査隊の一員として東アフリカへ調査に赴きました。帰国した林氏から、感染症が今もアフリカの人々の健康を脅かし、最大の死因となっているとの報告を受けた同研究所の片峰大助教授らは、自ら調達した資金で独自の調査隊を翌1965年東アフリカへ派遣することを決意。そして1967年には、世界の熱帯医学研究の一翼を担うべく、熱帯医学研究所(以下、熱研)と組織を改め、活動のフィールドをフィリピンやタイなど東南アジアにも広げていったのです。

同じ頃、医学部も政府の要請を受け、ベトナム戦争中のサイゴン病院へ医療班を派遣します。その後、海外技術協力事業団(現在のJICA)の要請でケニア・リフトバレー州立病院での医療協力を開始。1966年に開始したプロジェクトは、1975年まで継続され、活動の一員だった柴田紘一郎氏(外科医)が、さだまさし氏の楽曲「風に立つライオン」のモデルになったことでも知られています。独立行政法人長崎県立病院機構の片峰茂理事長は、基礎医学の領域で長崎大学の感染症研究に貢献された人物の一人。父の大助氏とは歩んだ道が異なる

仕事にこそ意義がある。

りますが、「熱研とは常に並走してきた」と振り返ります。片峰理事長のお話です。「寄生虫の専門家だった父が、家にいた記憶がほとんどありません。五島、沖縄、鹿児島など、常にフィールドに出掛けているからです。その結果、日本から寄生虫はほとんど消えました。次に何をやるのか、当然その議論はあったはずですが、長崎大学は歴史的背景を礎に、進むべき道を模索していたと思います。父を含め熱研の研究者は、現場に足を運び寝泊まりをしながら仕事(研究)をするに意義を感じていましたから、林先生にアフリカのフィールドの話聞いた時、「ここだ」と直感したのでは

う。現場に向いて、研究や医療支援を展開するという長崎大学の強みを最大限発揮できると考えたのではないのでしょうか。国内の他大学では感染症研究が縮小される中、国境を越えて感染症が流入してきた「出島」以来の歴史を知る彼らは、日本において感染症を抑え込んだとしても、それが感染症を克服したことにはならないことをよく理解していたのではないのでしょうか。20世紀後半におけるエイズやBSE(狂牛病)等の多くの新興感染症の出現は、その理解の正しさを証明することになりました。片峰理事長のお話は続きます。「一方、忘れてはならないのが、臨床医

学と基礎研究で世界的業績をあげてきた医学部や附属病院の存在です。長崎の離島地域がいくつかの病原ウイルスの濃厚流行地であったことが理由の一つです。その代表が1980年代初期に発見されたHTLV-Iです。HTLV-Iは成人T細胞白血病(ATL)を起こすウイルスです。20世紀後半におけるエイズやBSE(狂牛病)等の多くの新興感染症の出現は、その理解の正しさを証明することになりました。片峰理事長のお話は続きます。「一方、忘れてはならないのが、臨床医

学と基礎研究で世界的業績をあげてきた医学部や附属病院の存在です。長崎の離島地域がいくつかの病原ウイルスの濃厚流行地であったことが理由の一つです。その代表が1980年代初期に発見されたHTLV-Iです。HTLV-Iは成人T細胞白血病(ATL)を起こすウイルスです。20世紀後半におけるエイズやBSE(狂牛病)等の多くの新興感染症の出現は、その理解の正しさを証明することになりました。片峰理事長のお話は続きます。「一方、忘れてはならないのが、臨床医

※2 HTLV-I
主要な感染経路が母乳であることを突き止めた長崎大学医学部は、妊婦の抗体検査を実施。感染者の約9割が母乳に同意する(推定)。ハードルが高い感染予防対策が実現に至ったのは、長崎県や日本母性保護産婦人科医協会長崎支部の協力が大きい。

3 オンリーワンから 世界トップレベルへ。

新型コロナウイルスによる世界規模のパンデミックにおいても、河野学長の指揮の下、長崎大学は県の対策調整会議を主導し、クルーズ船のクラスター対応などに尽力しました。常に現場に軸足を置き、現場での活動を第一にする姿勢は、変わらず今も受け継がれていることを示したのです。そして、新型コロナの課題や教訓から、感染症研究をさらに推し進めるべく、2022年には「長崎大学感染症研究出島特区」を新設。特区の名のもと、感染症研究を精力的に推進する5つの部局が集結する新体制が整えられようとしています。特区長を務める、森田公一教授に展望を聞きました。「長崎大学には熱帯医学研究所、高度感染症研究センター、熱帯医学・グローバルヘルス研究科、医歯薬学総合研究科、大学病院の各部局に、合わせて100人以上の感染症の専門家が在籍しています。関連する他部局の教室を含めれば、もっと多いでしょう。国内にはこのよ

うな大学は他にありません。まさにオンリーワンなんです。しかしこれまでは、それぞれが独立した部局として動いていました。過去の経験から、感染症研究にはスピードが問われます。そもそも感染症の広がり自体、航空機の発達でより早くなりました。パンデミックへの備えを考えた時、これらの組織が有機的に連携し一斉に動き出す必要があります。そうすることで短期間に成果が出せるのです。今回のコロナ禍では、特に診断の面でこれまでの研究の蓄積がスピーディな動きにつながりました。今後はこの特区の機能を活かし、治療薬やワクチン開発の面で、成果を出したいと考えています」。広い海原の先に未来を見据えた先人たちのように、世界トップレベルの感染症研究を目指す長崎大学。新たな航海はまだ始まったばかりです。

参考文献
「熱研75年の歩み 長崎大学熱帯医学研究所創立75周年記念」(長崎大学熱帯医学研究所創立75周年記念事業実行委員会発行)、「長崎大学医学部創立150周年記念誌」(長崎大学医学部創立150周年記念編集・発行)



【インタビュー】

長崎大学が挑んだ 新型コロナとの 最初の4カ月間の闘い



泉川公一 教授
副学長(新型コロナウイルス感染症対策担当)

初期の段階から新型コロナウイルス感染症の対策にあたった長崎大学。2020年1月、中国武漢に滞在中だった邦人の帰国に際して、厚生労働省から支援要請が入ったことが発端となりました。当時、千葉県の帰国者用の宿泊施設へ向かった泉川公一副学長は、次のように回想します。

「施設には感染対策のプロがおらず、学長より要請を受けた私が現地に入り、帰国者の支援者の皆様には、防護服の着脱や帰国者の健康管理などの支援を行いました。しかし、滞在初日に横浜港でダイヤモンド・プリンセス号の集団感染が発生します。情報が入った時点ですでに船内は混乱した状態であり、宿泊施設の継続的な支援は他の長崎大学チームのメンバーに引き継ぎ、学長の許可を得て、ダイヤモンド・プリンセス号へ乗り込み、支援を行いました。」

ダイヤモンド・プリンセス号の教訓も記憶に新しい2020年4月。長崎港でコスト・アトランティカ号の集団感染が発生。すべての乗員にLAMP法を用いた新型コロナウイルスの検査を行い、その総数は4日間で622人に上りました。当時、これだけの短期間に、これだけ多くの検体を検査できたのは、特筆すべきことでした。

泉川副学長は続けます。
「河野学長の強力なリーダーシップの下、基礎研究のエキスパートである熱研の先生方や医学部、大学病院が連携を取りながら検査、診断、そして治療に取り組みました。感染の恐怖と闘いながらの活動は時に厳しい場面もありましたが、陽性者が増えるたびに多くの症例を診ることにつながり、その結果、自信もついていきました。帰国者支援からコスト・アトランティカ号の対応が終了するまで約4カ月間。感染症の専門家を多く擁する、本学の強みが発揮された濃密な期間だったと思います。一方、その後、現在にいたるまで、治療薬やワクチンの開発については、諸外国から大幅に遅れを取っていると痛感しました。開発には莫大な予算と時間、そして多くの人材を要します。このような実状を国や社会にしっかりフィードバックし、本学が舵取りの一員になれるよう努力していくことが今後の課題ではないでしょうか。」



2020年5月31日、長崎港をあとにするコスト・アトランティカ号。(写真提供:長崎新聞社)

【インタビュー】

人材養成の観点から感染症対策を考える



西田教行 卓越教授
生命医科学域

新型コロナウイルスの拡大前から、新たなウイルスの発生と蔓延を予測していた本学の研究者たち。彼らは、世界のリーダーとなれる感染症の研究者や、大学が持つ学術的エビデンスを高いレベルで社会に還元できる専門家の育成を、重要なミッションと位置付けていました。

取り組みの一步となったのが、2012年にスタートした「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム(TECD)」。

感染症問題を俯瞰的に捉えられる、新しいリーダーの育成を目指して、新たな大学院博士課程教育の意欲的な取り組みを開始しました。本プログラムを基盤に、2019年にはロンドン大学衛生・熱帯医学大学院とのパートナーシップによるジョイントディグリー専攻が「卓越大学院プログラム」に採択されました。さらに2022年10月には「プラネターリーヘルス学環」の設置に至り、研究活動と並行して政策立案のプロフェッショナル人材育成の場が整えられてきました。

「本学に感染症の専門家を育てる場が増え

ている理由は、より多くの多様な人材が求められているからです」。そう語るの、これまでTECDのカリキュラム作成など、教育プログラムの運営に携わってきた西田教行教授。新たな人材育成の必要性について次のように話します。「例えば、新型コロナウイルスの対応を振り返った時、人流や輸送環境が制限される中、全世界の人々に治療薬やワクチンを供給するためには、どのような手段が必要だったのでしょうか。また、差別をなくすためには教育環境の充実が図られるべきでしょう。ほかにも様々な課題が浮き彫りになりましたが、今後さらに強固な体制で新たなウイルスの発生に備えるためには、社会システムの問題点を分析し、科学的エビデンスと専門的な考えに基づいた政策を推し進められる、実行力を伴った専門家の育成が不可欠です。感染症研究のトップランナーである本学には、基礎研究のみならずそのような人材育成を期待されているし、実行できる力があるのです」。

※プラネターリーヘルス学環:学術的知見を効果的に実社会に結びつけることができる、博士レベルの実務家養成を目的とした大学院。



【TOPICS】

高度安全実験(BSL-4)施設 人類を守る高度な感染症研究拠点

2021年7月、長崎大学坂本キャンパス内に竣工し、本格稼働に向けて準備を進めている高度安全実験(BSL-4)施設。BSLとは、実験施設の安全機能のレベルを意味し、BSL-4施設は、エボラウイルス病やラッサ熱など、致死率が高く、有効な予防法や治療法がない感染症の原因となる病原体の取り扱いに必要な、高度な安全機能を備えた施設です。交通網の発達やグローバル化により、短期間で感染症が世界中に蔓延する危険性が現実のものとなりました。現在、世界20数カ国に

60施設以上のBSL-4施設が存在する中、我が国では国立感染症研究所が唯一の実験施設であり、診断と治療目的のみ使用が認められている状況です。2022年4月に、BSL-4施設を管理運営し研究を推進する附属研究所として長崎大学高度感染症研究センターが設置されました。本施設の本格稼働を機に、長崎大学と日本全国の研究者の協力のもと、より高度な感染症研究が可能になります。未知の感染症の脅威から人類を守るための、大きな一歩を踏み出そうとしています。

Research

【研究】



研究に関する情報は
こちらからも
ご覧いただけます。

Nagasaki University
Research

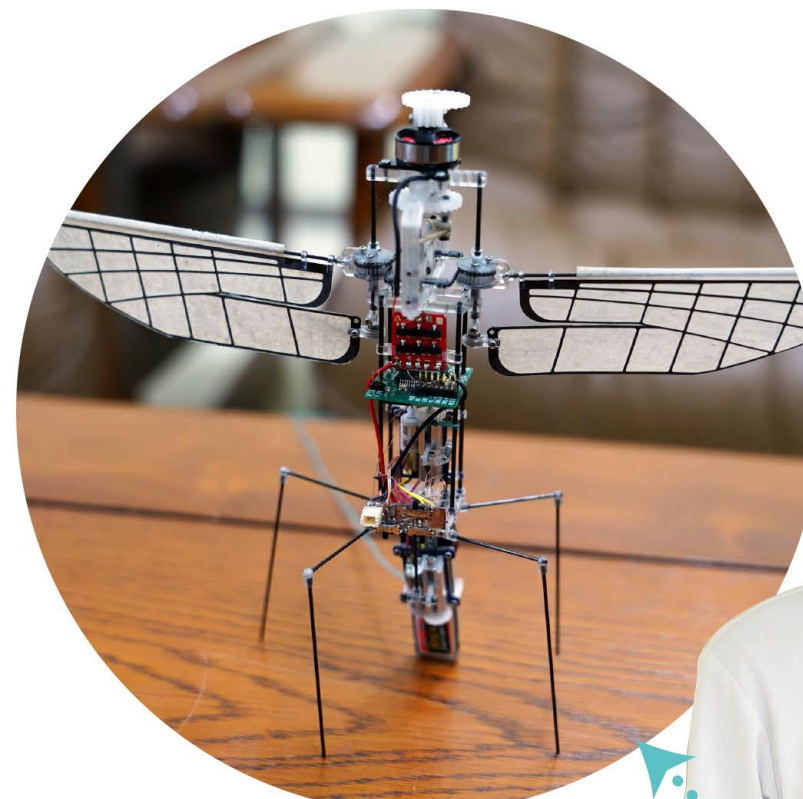
羽ばたき型 ドローン

航空宇宙工学・
空力弾性学研究室

鳥が羽ばたくように空を飛ぶ 人間や自然にも優しい 新時代のドローン

肥料散布や物資輸送など業務用のほか、おもちゃ感覚で気軽に購入できるようになったドローン。普及が進む一方で、様々な課題が挙げられています。鳥や虫など生物の飛行を規範とした「羽ばたき型ドローン」の開発を行っている、永井弘人准教授(工学部工学科構造工学コース)のお話です。

「既存のドローンは、プロペラが回転しながら飛行します。プロペラはとても硬く、小さなドローンでもケガをしたり、建物に傷をつけたり、何かを巻き込む危険性があります。音もうるさいので、現状としては、かなり建物や人から離れた屋外での飛行や、自然環境の中での空撮に限られています。以前は、鳥や虫がどのように羽ばたいているのか、メカニズムについて分からない部分が多かったのですが、2000年以降にコンピューターによるシミュレーション技術が発達した結果、研究が進みました。現在は生物の観察や分析から得た着想を、工学的なものづくりに取り入れるバイオミメクスと呼ばれる研究がさかんです。私たちの研究でも、生物の柔軟な構造を応用し、街中や建物内でも飛行できるドローンの実用化につなげようとしています」。



羽ばたき型ドローンの開発は、九州大学、日本文理大学、株式会社村田製作所との共同研究。現時点では、ワイヤレスでのホバリング飛行や垂直離陸に成功しました。「軽量化を図るためには、様々な企業の方々のご協力が必要です」と永井准教授。



研究室の学生とともに推力測定実験中の様子。永井准教授の研究室には、大学院生を含む17人が在籍しています。

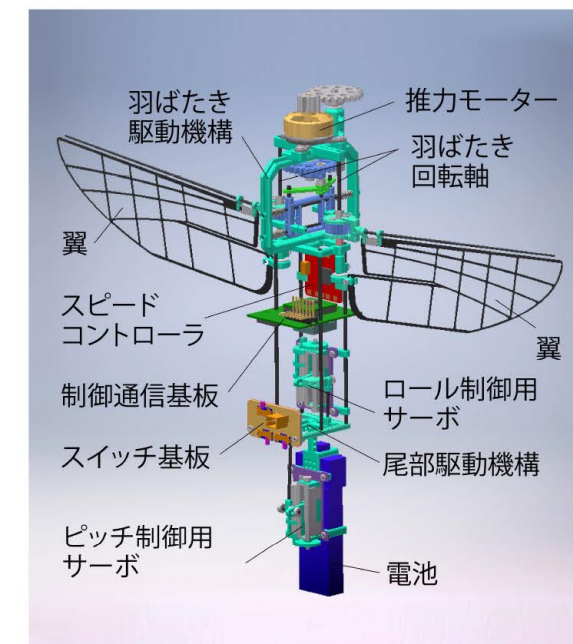
現在、羽ばたき型ドローンの両翼サイズは18cm。材質は不織布を使用しています。また、機体の重量は20gで、飛行機と同じ炭素繊維で作られているのだとか。どのような生物を規範にしたのでしょうか。

「ホバリングしながら空中に留まることのできる、ハチドリという小さな鳥とちょうど同じサイズです。翼の構造や動き方は、トンボやハチなど昆虫を参考にしています。鳥や虫には、飛行機のような水平を保つための尾翼がなく、傾いた場合は自力で体勢を戻します。風が吹いても、安定して飛べるのがすごいところ。開発中のドローンは、尻尾の部分を前後左右に動かすことでバランスを保ち、30秒間空中に留まることに成功しました。将来的にはホバリングから前進飛行したり、止まったり、下りたりできる自由な飛行を目指しています」。

ハチドリと同じサイズでも、羽ばたき型ドローンの重量はまだその2倍。今後は軽量化が課題だと永井准教授。

「軽くできればカメラやマイクなど色々な物を積みめやすし、安全性や運動性もアップします。そもそも機械は変形しないように硬く作るものですが、生物は柔らかいから軽いのです。生物に近づけるためには、軽量化した柔軟性のあるドローンを作らなくてはなりません」。

ポケットに入る手の平サイズのドローンが、安全に軽やかに飛び回る未来。実現した暁には、崩壊しそうな建物内での捜索や、商業施設・教育現場といった不特定多数の人や子どもがいる場での飛行など、様々な用途が期待されています。



航空宇宙工学が専門の永井弘人准教授。

Circle

[サークル]

Circle Interviews

学生広報
スタッフが
インタビュー

長崎大学全学ヨット部は1953年の創部から、今年で70周年を迎えました。今回は現役部員(2022年入学)の私が、1977年に入部され、現在は「琴風会」(ヨット部のOB・OG会)の事務局を務める貝原さんにお話を伺いました。

高田春歌
多文化社会学部2年



1953~

[長崎大学全学ヨット部]

子々川から世界を夢見た先輩たち

—貝原さんが入部された当時のヨット部の様子を教えてください。

貝原さん 当時部員は各学年6人前後、計20人程度で、建物は変わりましたが、現在と同じように時津町子々川の臨海研修所の艇庫で活動していました。練習は主に土日で、土曜日は半日授業があったので午後から、日曜日は朝の9時から17時頃までずっと海上で陸には戻ることなく練習していました。昼食には鯖缶とご飯などをヨットに積んで持っていきまして。長期休みの期間中、だいたい年に70~80日くらいは子々川で合宿もしていましたね。

—現在も毎週土日に子々川で練習しているのは同じですね。練習メニューによっては一日陸に戻らないことも時々ありますが、基本的には昼休憩



お話を伺った貝原宗重さん。
(1983年医学部卒業)

を挟んでいます。貝原さんがスナイブ級の

主将を務めた1980年に全日本インカレのスナイブ級団体が優勝したことが、艇庫の壁に貼ってある新聞の記事に記されています。貝原さん それについては色々あるのだけれど、まあ(笑)。本当は「4位」なんです。大会1日目、2日目までは長大はトップだったのです。大会は実は4日間あったのですが、ネットや携帯電話のなかった当時、早とちりした新聞社は順位が決まる前に「優勝」と報じてしまいました。OBも長大が優勝したと

思い喜んで長崎で待っていてくれました。その頃OBからは「オリンピックに出なさい」と言われていたので、部員みんなもうちょっと上を目指したかったですね。気持ちは、日本国内ではなく世界に向いていました。

—「幻の優勝」と呼ばれていた理由を現役部員の自分も初めて知りました! とても高いモチベーションをもって活動していたのですか? 練習がきついと感じることはなかったのですか?

貝原さん そりゃあ、1年生の頃はもう泣いていました。風の強い日は操船が難しいので川沿いの林が揺れているのを見るのも嫌で、それでもみんなヨットが好きだし、子々川が好きなのでしょうね。ほっとする、すごく良い環境。加えて艇庫があって寝泊まりもできる施設のある大学はそうそうありません。遠方にいるOBも、長崎に来た際には子々川に立ち寄りて海を見て帰るそうです。—当時のヨット部の恒例行事などについても教えてください。

貝原さん 毎年、夏の合宿中には2泊3日の大村湾1周クルージングをしていました。1泊目は大村、2泊目は西海橋までヨットで行ってみんなで泳いだり、キャンプをしたりしていました。年末には研修所の向かいのお家の方から杵や臼をお借りして餅つきをして、一年の練習納めとするのが恒例でした。またかつて大村湾にあったNBCハーバーを利用して、現在の長崎総合科学大学や長崎市内の各高校のヨット部と合同で練習することもありました。

そして今とは異なる点のひとつが、期間を決めて部全体でアルバイトをして活動費を集めていたことです。長崎各

地で建設業のアルバイトをして、セール(帆)の購入費用に充てたりしました。—私たちが今年からコロナ禍の制限が緩和されて、伝統だった新入生歓迎会とOBとの交流会を兼ねた子々川でのBBQを復活させることができました。これから現役部員はもちろん、OBや色んな方と子々川でヨットを楽しめる機会を増やしていきたいです。最後に、現役部員、そしてこれからの長崎大学全学ヨット部へのメッセージをお願いします。

貝原さん 現在約240人のOBがヨット部の活動を支援していますが、もちろん主体は学生です。クラブの運営を自分たちでどうするか、というのは社会に出てからも役に立つ最も大事な経験です。試合で勝つこと以上に、クラブ運営の中で成長していくことが大事だと思います。ヨットは他の部活と違って荒海に出る上に、遠征、整備、資金の工面など様々な苦勞もあります。楽しいのも大事だけど、苦しみば苦しみほど、自分にとって

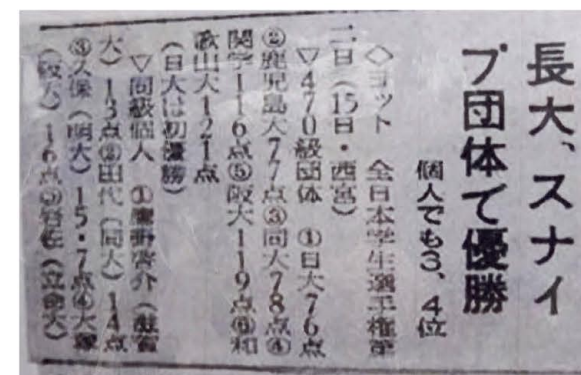
良い経験になります。OBとしてはこれからは長生きして、みんなで支えていきましょうという気持ちです。それに現役が応えてくれたら嬉しいですが、目標を大きく持って、頑張ってください。

創部年: 1953年(昭和28年)
部員数: 26人
活動日: 土・日:9:00~18:00(時津町子々川)
木18:30~20:00(長崎市当陸上競技場)



1年生が加わって賑やかになった現役部員。練習にも力が入ります。

今回、現役部員でありながら学生広報スタッフとして取材をさせていただきました。普段の活動中にはなかなか聞く機会がなかった部の歴史やOBの方々の想いを知り、部への、そして「子々川」という場所への思い入れもさらに強まりました。これからも海とヨットを通して出会えた人への感謝を忘れず、少しずつでも成長して結果を出せるよう、日々の練習に取り組んでいきたいと思えます。



昭和55年の新聞記事。たしかに「優勝」の文字が!



目の前に大村湾が広がる子々川の自然豊かな環境の中、ハードな練習に取り組んでいます。



OBの方が技術指導や艇の修繕にあたってくださっています。今年2月には新艇(写真上)を寄贈していただきました。

Saiyu Fund

[西遊基金]



寄附に込める想い

恩師の言葉に初めて意識した我が母校

社会医療法人天神会理事長 古賀伸彦さん



このたびは1947年1月11日生まれ。1971年長崎大学医学部卒業。久留米大学第三内科(当時、木村内科)を経て、医療法人天神会吉賀病院副院長、新吉賀病院院長などを歴任し、現在は社会医療法人天神会理事長。専門は循環器内科、医学治療(血液浄化)。1976年透析室開設、1978年冠動脈造影開始。1982年LDLアフェレンス開始。コレステロール低下と動脈硬化の改善について臨床研究。1984年PTCA開始、1988年経皮的人工心臓開始、2004年冠動脈CT開始。現在は高齢者医療に力を注いでいる。

〈所属学会〉
日本内科学会、日本循環器学会、日本透析医学会、日本腎臓学会、国際アフェレンス学会、日本アフェレンス学会、日本統合医療学会

〈活動〉
特定非営利活動法人
久留米からくろ振興会 理事長

私は昭和46年に長崎大学医学部を卒業しました。大学時代を振り返りますと、水泳部の活動にあけくれた日々が心に浮かびます。在学中に文教キャンパスに現在の教育学部プールができ、医学部の学生は他学部で泳いでいたのに泳いでばかり。一体何をしているのだろうと、言われることもありましたが、唯一やりたかったことが水泳だったので、そんな私に向かってある友人は「あなたは泳いでいるからあなたなんだ。一生懸命打ち込んでいる、それが尊いんだよ」と、励ましてくれました。

また、医学部泌尿器科の近藤敦教授(故人)

は、卒業後もお世話になった恩師の一人です。近藤先生は水泳部の顧問を務めておられ、試合で好成績を出した折には宴席を設けてくださるなど、威厳がありながらも愉快で面倒見の良い方でした。私は医学部を卒業後は長崎を離れ、久留米大学第三内科(当時の木村内科)に入局しました。父が作った吉賀病院に戻り、透析室を開設することになった折には、近藤先生のお力添えもあり、長崎大学の泌尿器科と第二内科(腎臓内科)で実地研修の機会を得ることができました。恵まれた環境で研修を終えることができましたが、近藤先生には私が遠慮しているように見えた時があったようです。「母校なんだか

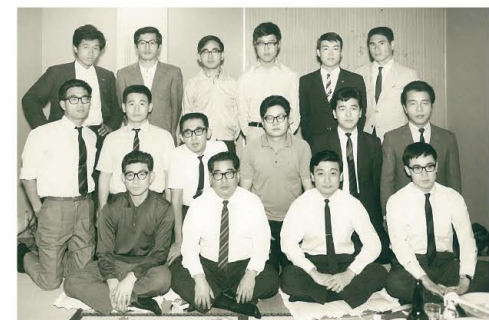
ら遠慮することはないんだよ」。そう言葉を掛けてくださり、初めて「母校」という言葉を意識しました。

私はこれまで前だけを見て歩んできました。そろそろ人生を振り返る時期だろうと考えていた時に、西遊基金が創設されたことを知りました。もしかしら、かつて冗談のように近藤先生がおっしゃった「将来プールぐらい寄附しなさい」という言葉が、頭の片隅に残っていたのかもしれない。

振り返れば長崎大学に入学した頃の日本は、高度経済成長の真っただ中にありましたが、まだ周りは比較的貧しく、下宿部屋にテレビを置いている仲間はいませんでした。水泳部には、病院の当直やバスの車掌など、アルバイトをしながら学業と部活動に励んでいる仲間もいました。豊かな時代になった今でも、苦勞を重ねながら頑張っている学生さんはいらっしゃるでしょう。寄附はあくまで気持ちでしかありませんが、困窮されている方のために役立てていただければと思います。



鹿児島で開催された西部国公立水泳競技大会にて。左から4目が古賀理事長。



長崎大学医学部水泳部コンパ。前列左から2人が近藤敦教授。

Support Fund

キャンパスの中心に憩いの場を

キャンパス環境整備基金へご支援をお願いします

文教キャンパスの中心地である教育学部と教養講義棟間エリアの老朽化した建物を取り壊した後の活用方法について、2021年度に学内コンペを行い、最優秀賞の学生のアイデアに基づき整備を行いました。新たに芝生の広場や、学園祭等の舞台となるレンガ造りのステージ、クスノキを植樹して並木道等を作り、学生、教職員そして地域の皆様の憩いの場となるような“中庭”を創出します。

同事業をはじめとしたキャンパス整備を支援するために西遊基金に「キャンパス環境整備基金」を新たに立ち上げました。皆様からのご支援をお願いいたします。



イベント開催時の様子(イメージ)



夜間ライトアップの様子(イメージ)

Homecoming Day

母校に会いに来ませんか? ホームカミングデー2023開催日が決定

日時/令和5年11月4日(土)15:00~

場所/長崎大学文教スカイホール

今年も学園祭に合わせて、ホームカミングデーを開催します。世代や学部を超えた同窓生との新たな出会い、旧友との再会、現役の長崎大学生との交流等を通じて、親睦を深めていただく年に1度の特別な日です。併せて、長崎大学の教育研究の最新情報をご紹介します。

第一部では講演会等、第二部では立食形式での懇親会を予定しています。詳細は8月頃本学ホームページにてご案内予定です。ぜひふるってご参加ください。



いち早く、確実にホームカミングデーの開催案内を受け取るために
校友会メールマガジンにご登録ください。

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、種々の問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援、さらに教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。



西遊基金に関する情報はこちらからご覧いただけます。

